舞ちゃんへ

　留守番を舞に任せて買物へ。つい話し込んでしまった。時計を見てびっくり。すぐに家に飛んで帰った。家には舞のほか寝たきりの義母がいた。義母の耳は聞こえなかった。目も見えなかった。そのうえ全く言葉を話せなかった。義母の部屋の戸を静かに開けた。六歳の舞が七十二歳の義母に粥を匙で掬って食べさせていた。粥には梅の果肉を刻んで混ぜてあった。義母は舌鼓を打って食べていた。私は義母に謝った。義母の反応はなかった。

　そして舞にも謝って礼を述べた。舞は「謝らなくていい。母さんは遊びに行ったんじゃないから。昼になってお腹が減った。婆ちゃんも同じと思った。母さんを真似て粥を作った。梅の果肉を混ぜたのは美味いから。私の工夫。留守番は何時でも任せてね」と言った。

　空腹を覚えたとき義母も同じと考えた。空腹を我慢しつつ義母の食事を作って食べさせた。舞ちゃん、その心を決して忘れないで！

応募時（新潟県35歳）小林美砂子